

山口市での水田経営改革と トウモロコシ生産に注目

子実トウモロコシの収穫作業を初めて見たのは2012年10月21日になり、北海道長沼町の柳原孝二さんのところであった。柳原さんはその年の12月1日に開催されたA11グランプリ全国大会でグランプリを受賞することになるが、それに先立って行なわれた10月2日の相談会で彼からその話を聞いた。故松尾雅彦さんや鹿兒島県志布志市で加工ジャガイモやケールの輪作としてデントコーンを生産している坂上隆さんも誘って柳原さんを訪ねたのだ。

試作を始めて2年目のトウモロコシは決して良い出来とは言えなかった。品種の選択や栽培管理もまだわからないままの作付けだったのだ。しかし、昨年の彼の転作田で見たトウモロコシの姿はすばらしく、僕が見たその圃場では10a当たり1・3tもの高収量だったという。

柳原さんのトウモロコシに関心を持った僕は畜産農家の読者から飼料価格、特にトウモロコシの価格が暴騰しているという話を聞いていた。ちなみに、13年のトウモロコシ輸入価格は年間平均でもt当たり3万1

049円、これは組み換えトウモロコシの価格だ。NoniGMが分類されている「その他の関税割当り当てもの」という区分だと3万9018円。月によっては4万1000円を超えていた。

柳原農場を訪問して数日後、ある外資の農薬・種苗メーカーのアジア地区の代表に会う機会があった。そこで、我が国の水田転作としてトウモロコシ生産拡大の可能性があることを伝えたが、日本は飼料米ではないのかと理解しなかった。13年の春に農水省の課長クラスの人々数名に集まってもらい、説明に行った際の反応も変わらなかった。一緒に行動してくれたのはバイオニアエコサイエンスの竹下達夫社長だった。

13年春から読者への呼びかけを始め、各地で実演検討会を開催してきた。府県で最初に取り組んでくれたのは岩手県花巻市の盛川周祐さんと秋田県大潟村の宮川正和さんの二人だった。花巻では生産初年度目から盛川さんらの作るトウモロコシを同じ市内の養豚業者である白金豚のブランドで有名の高橋誠さん（高源精麦）に供給している。宮川さんは昨年で23haまで生産を拡大し、養鶏業

者を中心に出荷している。その後、柳原さんは仲間たちとともに北海道子実コーン組合を設立し、生産を拡大している。

本誌が把握している昨年の播種面積は北海道で約250ha、青森から鹿兒島まで府県各地で約100haの合計約350haである。今年度からは水田での子実トウモロコシ生産が農水省の政策として取り込まれることになった。

僕がトウモロコシ生産を呼びかける理由は水田に畑作技術体系の導入を進めるためだ。それがあべき水田農業の技術革新だからだ。そして、畑作体系での水稲作に加え、これから圧倒的な勢いで供給されることになる水田をトウモロコシによる転作でこなすべきだと考えているのだ。さらに、僕がこれから力を入れようとしているのは先進的農家たちへの働きかけだけではなく、市町村の行政関係者とともに地域の高齢農家や集落営農の組織者たちを巻き込んでいくこと。将来に不安を抱えている集落営農の経営者や農地の提供先に不安を持つ高齢の地権者に地域農業の未来の姿を納得してもらうためだ。2年前から始めている山口市での取り組みがこれからの地域水田経営改革を考えるうえで良いヒントになる。その取り組みは逐次紹介したい。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。